

卷第二 述少陰病

少陰病者、表裏虛寒證、是也、有_二直中_一焉、有_二傳變_一焉、是故有_下專于表_上者、有_下專_上于裏_上者、然至_二其重_一、則俱無_レ不_レ涉_二表裏_一矣、直中者、所謂發_二於陰_一者也、其人陽氣素衰、邪氣之中、不_レ能_二相抗_一、爲_レ其所_レ奪、直爲_二虛寒_一者矣、而有_二輕重之分_一、蓋裏未_二甚衰_一、表專虛寒者、邪氣相得、以稽_二留_一表、故猶有_二發熱_一、此病爲_レ輕、如_二麻黃附子細辛甘草二湯證_一、是也、

少陰病とは、表裏虚寒證、是也、直中有る焉也、傳變有る焉、是故に表を専らにする者有り、裏を専らにする者有り、然しかうして其重きに至れば、則ち俱ともに表裏に涉わたらざる無し矣、直中とは、所謂陰に發する者也、其人陽氣素もと衰え、邪氣の中、相抗する能わず、其の爲に奪われて、直に虚寒を爲す者矣、而しかうして輕重の分有り、蓋し裏未だ甚だしくは衰えず、表専ら虚寒者、邪氣相得、以て表に稽留とどまるす、故に猶發熱有り、此病輕きと爲す、麻黃附子細辛・麻黃附子甘草の二湯證*の如き、是也、

*少陰病二十一條「少陰病 始得之 反發熱 脈沈者 麻黃附子細辛湯主之」

少陰病二十二條「少陰病得之二三日 麻黃附子甘草湯微發汗 以二三日無(裏玉函經)證 故微發汗也」

柯氏曰、本條、當_レ有_二無_レ汗惡寒證_一、趙氏曰、少陰發汗二方、雖_二同用_二麻黃附子_一、亦有_二加減輕重之別_一、故以_レ加_二細辛_一爲_レ重、加_二甘草_一爲_レ輕、辛散甘緩之義也、除氏於_二甘草湯下_一、曰、此較_下加_二細辛_上者、易_二甘草_一爲_二調停_一、其藥勢之緩多矣、因細詳_二立方之意_一、言_二少陰病二三日_一、比_二初得_レ之_一、略多_二一二日_一矣、日數多而無_二裏證_一、寒邪所入尚淺、是以陰象不_レ能_二驟發_一、故將_二此湯_一微發_レ汗、微云者、因病情不_二即內入_一、而輕爲_二外引_一也、校三說並妥、

柯氏曰く、本條、當に汗無く惡寒證有るべしと、趙氏曰く、少陰發汗二方、同じく麻黃附子を用いると雖も、亦加減輕重の別有り、故に細辛を加えるを以て重と爲す、甘草を加え輕と爲す、辛散甘緩の義也と、除氏甘草湯下に於いて、曰く、此を細辛を加える者に較くらべて、甘草に易かえるを調停和解させると爲す、其藥勢の緩ゆるやか多まざる矣、因つて細かく方を立てるの意を詳つまびらかにして、「少陰病二三日」と言う、初め之を得るに比して、略ほぼ一二日多し矣、日數多くして裏證無し、寒邪入る所尚淺く、是以て陰象ありさまを驟シユウ・にわか發能わず、故に此湯を將もちいるは「微發汗」微と云うは、病情*は即ち内入せずに因りて、輕く外引ひろがるを爲す也と、校案ずるに三說柯氏趙氏除氏之說並妥、

*寒熱虚實、皆之を情と謂う也 参照卷一叙述

裏陽素弱、表氣從虚者、其感_レ邪也、表裏徑爲_二虚寒_一、蓋所_レ謂無_レ熱惡寒者、此病爲_レ重、如_二附子湯證_一、是也、

裏陽素もと弱、表氣從つて虚なる者、其邪を感ずる也、表裏徑ただちに虚寒を爲す、蓋し所謂いわゆる熱無く惡寒者、此病重きと爲す、附子湯證*の如き、是也、

*少陰病二十四條「少陰病得之一二日 口中和 其背惡寒者 當灸之 附子湯主之」

少陰病二十五條「少陰病 身體痛 手足寒 骨節痛 脈沈者 附子湯主之 附子二枚・茯苓・人參・白朮四兩・芍藥」

附子湯二條、傳變亦有_レ如此證_一、其方亦在_レ傳變_一所_レ必須_一、故注家未敢謂為直中_一、但成氏引無_レ熱惡寒_一以解之、似_レ有_レ所_レ見、今詳_レ其文_一、曰、背惡寒、曰、身體痛、手足寒、骨節痛、俱為_レ表寒之候_一、蓋陽氣素虧、筋骨乏_レ液、寒邪因以浸漬所_レ致、故不_レ似_レ麻附證之有_レ發熱_一、設自_レ非_レ裏虛_一、何以至_レ此寒盛_一乎、然則其兼見_レ裏寒證_一者、亦可_レ推知_一也、其方與_レ眞武_一相近、而彼主在_レ内濕_一、此主在_レ外寒_一、何則此附子倍用、所_レ以走_レ外、朮亦倍用、所_レ以散_レ表、蓋仲景用_レ朮、多取_レ治_レ表、用_レ人參_一者、固以救_レ素弱之陽_一、併制_レ朮附之燥_一也、千金用_レ此方_一、治_レ濕痺緩風_一、及指迷方、於_レ本方_一、加_レ甘草_一、用_レ蒼朮_一、名_レ朮附湯_一、以治_レ寒濕_一、俱足_レ互徵_一此證之為_レ表寒_一矣、先兄曰、附子之性、雄悍燥熱、散_レ沈寒_一壯_レ元陽_一、生則其力特猛、救_レ裏陽乎垂_レ脫之際_一、炮則其性稍緩、走_レ表分_一以溫_レ經_一逐_レ寒、前輩所_レ辨、殊屬_レ踳駁_一、此言能發_レ未_レ逮之祕_一、但率意論_レ之、似_レ下_レ治_レ表宜_レ力猛_一、治_レ裏宜_レ性緩_一、此殊不_レ然、蓋裏虛驟脫、非_レ急救_一則不_レ可、所_レ以用_レ生附_一、寒濕纏綿、過發則無_レ功、所_レ以用_レ炮附_一也、

附子湯二條、傳變亦此の如き證有り、其方亦傳變に在_レにおいて必須_一必ずなくてはならないとする所、故に注家未だ敢えて謂_レおもうに直中と為さず、但成氏無熱惡寒を引いて以て之を解す、見る所有るに似る、今其文を詳_レつまびらかにする、曰く「背惡寒」、曰く「身體痛、手足寒、骨節痛」、俱に表寒の候_一と為す、蓋し陽氣素_一もと虧_一かけ、筋骨液に乏_一とぼしい、寒邪因つて以て浸漬_一次第にしみこむこと致す所、故に麻附_一麻黄附子細辛湯證の發熱有るに似ず、設もし裏虛非_一あらもざるに自よれば、何を以て此寒盛に至る乎_一・反語、然れば則ち其兼ねて裏寒證を見_一あらわす者、亦推して知るべき也、其方眞武*と相近い、而_レしかして彼主に内濕に在り、此主に外寒に在れば、何ぞ則ち此附子倍用_一眞武湯（附子一枚）・附子湯（附子二枚）、外を走る所以、朮亦倍用_一眞武湯（朮二両）・附子湯（朮四両）、表を散ずる所以_一ゆえん、蓋し仲景朮を用いるに、多く表を治するに取る、人參を用いる者、固く以て素_一もと弱の陽を救う、併せて朮附の燥を制する也、千金此方を用いるに、濕痺緩風を治す、及び指迷方、本方に於いて、甘草を加え、蒼朮を用い、朮附湯と名づけ、以て寒濕を治す、俱に互に此證の表寒を為す徴_一しるしに足る矣、先兄曰く、附子の性、雄悍_一ユウカン・強くただけしい燥熱、沈寒を散じ元_一本來の陽を壯_一さかんにする、生_一なまは則ち其力特に猛_一たけし、裏陽や脱_一脱を垂_一あらわすの際を救う、炮_一ほうじるは則ち其性稍緩、表分を走り以て經を温め寒を逐_一しりぞける、前輩_一先輩辨する所、殊に踳駁_一ジュンバク・混じり合つて乱れているさまに屬す、此言能く未だ逮_一およばざるの祕_一を發_一はなつ、但率意_一意のままに之を論ずるに、表を治するは力猛_一つよいに宜しく、裏を治するは性緩_一ゆるやかに宜しきに似る、此殊_一ことに然らず、蓋し裏虛驟_一シュウ・にわかな脱_一脱、急救に非ざれば則ち可にあらず、生附を用いる所以、寒濕纏綿_一テンメン・まとわりつきはなれないに、過_一いきすぎる發すれば則ち功無し、炮附_一子を用いる所以也、

*少陰病三十六條「少陰病 二三日不已 至四五日 腹痛小便不利 四肢沈重疼痛 自下利者 此為有水氣 其人或欬或小便利或下利或嘔者 眞武湯主之 茯苓・芍薬・白朮二両・生薑・附子」

傳變者、有_レ下_レ自_レ太陰病_一者_上、有_レ下_レ自_レ少陽病_一者_上、有_レ下_レ自_レ太陰病_一者_上、大抵陽之變_レ陰、皆因_レ其人胃氣本弱、醫不_レ知_レ回護_一、汗下失_レ法、而陽虛胃寒、以為_レ此病_一、更_レ有_レ下_レ雖_レ不_レ被_レ錯治_一、逐_レ為_レ邪所_レ奪、因而變成者_上、

傳變者、太陽病自よりの者有り、少陽病自りの者有り、太陰病自りの者有り、大抵陽の陰に變わる、皆其人胃氣本^元弱、醫が回護^害をふせぎまもるを知らず、汗下で法を失^{あやまる}に因りて、陽虛胃寒、以て此病を為す、^更に錯^誤治を被^{こうむら}ざると雖も、逐に邪が爲^{ため}に奪^{みだれ}る所、因つて而^{すなわ}ち變成者有り、

其自_{少陽病}、及不^レ經_{錯治}者、並多_{所驗見}、然經無_{明文}、豈意在_{言外}者乎、又桂枝證多變爲^レ陰、義述_{于太陽中}、^更有_{盛人初得}太陽、逐變_{本病}者_上、賤役勞形、最多有^レ之、殆以陽有^レ餘_{于外}、而不^レ足_{于内}之故乎、其變自_{太陰}、詳述_{于前}、

其少陽病自より、及び錯治を経へざる者、並^{みな}多く驗^しるし見^{あら}われる所、然れども經に明文無し、豈意が言外に在る者乎か、又桂枝證多く變じて陰を為す、義は太陽中^{*}に述べている、^更に盛^強壯の人初め太陽を得て、逐に本病に變じる者有り、賤役勞形、最多之有り、殆ど陽が外に餘有りて、内に足らざるの故を以てする乎か、其變太陰からくるは、詳しくは前^述太陰病に述べている、

*卷二 述太陽病 「蓋し太陽病變じて陰を為す者、必ず多くは桂枝證からくる、其理何也か、既に是表疎、之を表實者に比して、陽氣稍弱、故に其重きこと一等者、或いは溫養を須^{もち}いれば、則ち其變じて陰と為り易き也^や、明らか矣、」

倘其自_{太陽}、而表熱仍在者、先救_{其裏}、後救_{其表}、如_{四逆桂枝二湯各施證}、是也、

倘^{もし}其太陽自よりにして、表熱仍在る者、先ず其裏を救い、後に其表を救う、四逆桂枝二湯各施^{ほど}こす證の如き、是也、

厥陰篇、下利清穀、不^レ可^レ攻^レ表、亦爲_{表裏併有者}而言、又桂枝人參湯、係_{其輕證}、程氏有^レ說、宜^レ參、桂枝加芍藥生薑人參新加湯、與^レ此稍異、並錄_{于兼變中}、

厥陰篇^{三十八條}「下利清穀、不可攻表」亦表裏併有者と爲^なして言う、又桂枝人參湯^{*}、其輕證に係わる、程氏說有り、宜しく參すべし、桂枝加芍藥生薑人參新加湯^{**}、此と稍異なる、並^皆兼變^{卷第四述兼變諸證}中に録す、

*太陽病下三十五條「太陽病外証未除 而數下之 遂協熱而利 利下不止 心下痞鞭 表裏不解者 桂枝人參湯主之
桂枝 甘草 白朮 人參 乾薑」

**太陽病中三十二條「發汗後 身疼痛 脈沈遲者 桂枝加芍藥生薑各一兩人參三兩新加湯主之
桂枝 芍藥 甘草 人參 大棗 生薑」

既無_{表證}、一係_{虛寒}者、隨^レ宜爲^レ治、如_{乾薑附子湯、茯苓四逆湯、芍藥甘草附子湯等證}、是也、

既に表證無く、一に虛寒に係^{つな}がる者、宜^ぎ・道理にかなうに隨^{したが}って治を爲す、乾薑附子湯、茯苓四逆湯、芍藥甘草附子湯等證の如き、是也、

上二方證、從無_{確解}、柯氏分爲_{緩急}、實似_{叶當}、其云^レ有_救陽救_{陰之異}者、恐不^レ然也、今玩_{文勢方意}、以^レ臆測^レ之、其病輕而來急者、屬_{乾薑附子湯}、何則晝日煩躁不^レ得^レ眠、比_下之躁無_{暫安時}之孤陽絕陰_上、有_{夜而安靜之異}、況未^レ至_{厥逆}、其方亦藥單捷而劑小、蓋單味則其力專一、可_以奏_効于咄嗟_上、而劑小則不^レ足_以對_大

敵_レ矣、其病重而來緩者、屬_レ茯苓四逆湯_一、何則云_レ病仍不_レ解、蓋是緩詞、其方亦藥重複而劑大、蓋重複則其力泛應、少_レ直搗之勢_一、而劑大則可_レ以廻_レ倒瀾_一矣、芍藥甘草附子湯、互舉_レ于兼變中_一、又甘草乾薑湯、爲_レ虛寒輕證_一、亦列在_レ兼變中_一、

上二方證、從_レした_レが_レう確解無し、柯氏分けて緩急と為すは、實に叶_レかなうに當_レあたるに似る、其陽を救い陰を救うの異_レちがい有るを云うは、恐らく然らざる也、今文勢_一文章の勢い方意を玩_レ研究し、臆_レ推量_一を以て之を測_レはかるに、其病軽くして來急者、乾薑附子湯*に屬す、何なれば則ち「晝日煩躁不得眠」之を躁して暫_レしばらくの安時無きの孤陽絶陰に比し、「夜而安靜」の異_レちがい有り、況_レありさま未だ厥逆には至らず、其方_一乾薑附子湯亦藥單_一單味捷_一はやくして劑小、蓋し單味なれば則ち其力專一、以て咄嗟_一トッサ・たちどころに奏効あるべきも、劑小なれば則ち以て大敵に對するには足らず矣、其病重くして來ること緩_レゆるやかなるは、茯苓四逆湯**に屬す、何となれば則ち「病仍不解」と云う、蓋し是緩やかなる詞_一ことば、其方亦藥重複にして劑大、蓋し重複すれば則ち其力泛_レハン・あまねく應_レ答、直_レすぐに搗_レトウ・たたくの勢少なれども、劑大なれば則ち以て倒瀾_一くずれた波_一を廻_レもどすべし矣、芍藥甘草附子湯***、互いに兼變中に擧げる、又甘草乾薑湯、虛寒輕證と爲す、亦列して兼變中に在り、

* 太陽病中三十一條「下之後復發汗 晝日煩躁不得眠 夜而安靜 不嘔不渴無表證 脈沈微 身無大熱者 乾薑附子湯主之 (乾薑 附子)」

** 太陽病中三十九條「發汗 若下之 病仍不解 煩躁者 茯苓四逆湯主之 (茯苓 人參 甘草 乾薑 附子)」

*** 太陽病中三十八條「發汗病不解 反惡寒者 虛故也 芍藥甘草附子湯主之 (芍藥 甘草 附子)」

○茯苓、前輩稱爲_レ益_レ陰、愚謂滲利之品、恐無_レ其功_一、蓋脾胃喜_レ燥而惡_レ濕、其燥必煖、陽氣以旺、其濕必冷、陽氣以衰、水穀淤滯_一、津液不_レ行、苓之滲利、能去_レ水濕_一、此所_レ以佐_レ薑附_一、以逐_レ中_一内寒_一、與_レ理中之朮_一、其理相近矣、

○茯苓、前輩_一先輩稱して陰を益_レ益すると爲す、愚謂_一おもうに滲利の品、恐らく其功無し、蓋し脾胃は燥を喜びて濕を惡む、其燥必ず煖_一あたたまる、陽氣以て旺_一さかん、其濕必ず冷える、陽氣以て衰える、水穀淤_一とどこおる滯_一、津液行_レめぐらず、茯苓の滲利、能く水濕を去る、此以て薑附_一乾薑附_一子を佐_レたすけ、以て内寒を逐_レう所、理中_一理中湯(人參・乾薑・甘草・白朮)の朮と、其理相近い矣、

傳變、無_レ專_レ表寒_一者_一、

傳變、表寒を專_レもつばらにする者無し、

傳變必經_レ表熱_一、則其理明矣、

傳變必ず表熱を経れば、則ち其理明らか矣、

直中麻黃附子證、或差_レ其法_一、必為_レ裏寒_一、如_レ太陽中篇四逆湯證_一、

直中麻黃附子證*、或いは其法を差_レたが_レえば、必ず裏寒を為す、太陽中篇四逆湯證**の如し、

* 金匱水氣病「水之爲病、其脈沈小、屬少陰、浮者爲風、無水、虛脹者爲氣、水、發其汗即已、脈沈者、宜麻黃附子湯、」
(麻黃 甘草 附子)

** 太陽病中六十四條「病發熱、頭痛、脈反沈、若不差、身體疼痛、當救其裏 宜四逆湯」(甘草 乾薑 附子)

此條、周氏注爲_レ優、又曰、若不_レ差、必會服_レ汗藥_一矣、亦似_レ是、蓋雖_レ列_レ太陽中_一、

實係_二少陰_一、顧是其初發熱頭痛、脈反沈者、麻黃附子二湯、所_レ宜_二酌用_一、而醫失_二其法_一、故至_二身體疼痛_一、其證殆與_二附子湯_一相同、而用_二四逆_一者、或是以_二其既經_一誤治、陽虛殊甚、而更_レ有_二厥冷等證_一耳、三陰無_二頭痛_一、是就_二經絡_一而言、戴原禮既辨_二其非_一正法、頭痛固有_二因_一陰寒上沖_二者_上、此卽是已、又上條四逆桂枝先後證、謂_二表裏異_レ病者_一、此條、謂_二虛寒似_一表熱_二者_上、其意互發、陽明篇小柴胡、亦有_二其例_一、

此條*、周氏注を優_{まさる}と爲す、又曰く、「若不差」必ず會_{たまたま}汗藥を服す矣、亦是に似る、蓋し太陽中に列すると雖も、實は少陰と係_{つな}がる、顧みるに是其初「發熱頭痛、脈反沈」とは、麻黃附子二湯_{麻黃細辛附子湯・麻黃附子甘草湯}、酌用_{はからいもちいる}に宜しき所、而_{しかる}るに醫其法を失す、故に「身體疼痛」に至る、其證殆んど附子湯**と相同じにて、四逆を用いる者、或いは是其既に誤治を経るを以て、陽虛殊_{こと}に甚だしいくて、更_{更に}に厥冷等證有る耳、三陰頭痛無し、是經絡に就いて言う、戴原禮既に其正法に非ざるを辨ず、頭痛固たく陰寒上沖_{チュウ・湧}に因る者有り、此卽ち是已_{のみ}、又上條四逆桂枝先後證***、表裏で病を異_{こと}にする者を謂う、此條、虛寒が表熱に似る者を謂う、其意互發_{互いに明らかにする}、陽明篇小柴胡****、亦其例有り、

* 太陽病中六十四條「病發熱頭痛 脈反沈 若不差 身體疼痛 當救其裏 宜四逆湯方」

** 少陰病二十五條「少陰病 身體痛 手足寒 骨節痛 脈沈者 附子湯主之」

*** 太陽病中六十三條「傷寒 醫下之 續得下利清穀不止 身疼痛者 急當救裏 後身疼痛 清便自調者 急當救表 救裏宜四逆湯 救表宜桂枝湯」

**** 陽明病四十八條「陽明病 發潮熱 大便澇 小便自可 胸脇滿不去者 與小柴胡湯」

要_レ之至_二病重者_一、則直中傳變、證治無_レ二、俱皆以_二脈微細沈、心煩欲_レ寐、自利而渴、之_一を要するに病重き者に至れば、則ち直中傳變、證治二無し、俱に皆_レ脈微細沈、心煩寐と欲し、自利にて渴し、

* 少陰病一條「少陰之為病 脈微細 但欲寐也」

少陰病二條「少陰病 欲吐不吐 心煩但欲寐 五六日自利而渴者 屬少陰也・・・」

此渴爲_二津脫之故_一、程氏謂_二上熱_一者、誤矣、

此渴は津脫_脱の故と爲す、程氏上熱と謂うは、誤り矣、

厥冷外熱等_一、爲_二其正證_一、而四逆湯、以_レ溫_レ經回_レ陽、實係_二對治_一、

厥冷外熱等を以て、其正證と爲す、而して四逆湯、以て經を溫め陽を回_{めぐら}す、實に對_答治に係_{つな}がる、

本病僅以_二脈微細但欲_レ寐爲_二提綱_一、四逆所_レ主、於_二本篇_一、則唯是脈沈、與_二高上有_一寒飲_二乾嘔者_上二條已、然其證候散_一見各條、則宜_二會而通_レ之、如_二四逆湯_一、實是溫補諸方之祖、其爲_二少陰正治_一、誠不_レ待_レ辨焉、

本病僅_{わず}か「脈微細、但欲寐」を以て提綱_{事の主要な点を挙げたもの}と爲す、四逆主る所、本_{少陰病}篇に於いては、則ち唯「是脈沈」と「高上有寒飲、乾嘔者」と二條*已_{のみ}、然り其證候各條**に散見すれば、則ち宜しく會_{あつめる}して之に通_{精通}ずるべし、四逆湯の如き、實に是溫補諸方の祖、其を少陰正治と爲すは、誠に辨を待たざる焉_也、

*少陰病四十三條「少陰病 脈沈者 急温之 宜四逆湯 甘草二兩 附子一枚生 乾薑一兩半」

少陰病四十四條「少陰病 飲食入口則吐 心中温温欲吐 復不能吐 始得之手足寒 脈弦遲者 此胸中實 不可下也 當吐之 若膈上有寒飲 乾嘔者 不可吐也 當温之 宜四逆湯」

**太陽病上二十九條「傷寒脈浮 自汗出 小便數 心煩 微惡寒 脚攣急 反与桂枝湯 欲攻其表 此誤也 得之便厥 咽中乾 煩燥吐逆者 作甘草乾薑湯与之 以復其陽 若厥癒足温者 更作芍藥甘草湯与之 其脚即伸 若胃氣不和 譫語者 少与調胃承氣湯 若重發汗 復加燒針者 四逆湯主之」

太陽病中六十四條「病發熱 頭痛 脈反沈 若不差 身体疼痛 当救其裏 宜四逆湯」

陽明病四十四條「脈浮而遲 表熱裏寒 下利清穀者 四逆湯主之」

厥陰病二十七條「大汗出 熱不去 內拘急 四肢疼 又下利厥逆而惡寒者 四逆湯主之」

二十八條「大汗 若大下利而厥冷者 四逆湯主之」

四十六條「下利腹脹滿 身体疼痛者 先温其裏 乃攻其表 温裏四逆湯 攻表桂枝湯」

五十一條「嘔而脈弱 小便復利 身有微熱 見厥者 難治 四逆湯主之」

霍乱病七條「吐利汗出 發熱惡寒 四肢拘急 手足厥冷者 四逆湯主之」

○陶隱居曰、附子烏頭若干枚者、去^レ皮畢、以_二半兩_一準_一一枚_一、枚半兩、充_二今一分七釐四豪_一、比_二他藥_一殊輕、陶說可^レ疑、

○陶隱居曰く、附子烏頭若干枚者、皮を去り畢^{おわり}、半兩を以て一枚に準ず、枚^案ずるに半兩、今一分七釐^リ四豪^{ゴウ・毫}に充てる、他藥に比して殊に軽い、陶說疑うべし、

其重一等者、通脈四逆湯證、是也、下利甚者、更^更温_二其内_一、白通湯證、是也、而重一等者、加_二猪膽人尿_一、

其重き一等者、通脈四逆湯證*、是也、下利甚だしき者、更^更に其内を温める、白通湯證**、是也、而して重き一等者、猪膽人尿***を加える、

*少陰病三十七條「少陰病 下利清穀 裏寒外熱 手足厥逆 脈微欲絶 身反不惡寒 其人面色赤 或腹痛 或乾嘔 或咽痛 或利止脈不出者 通脈四逆湯主之 甘草二兩 附子大者一枚生 乾薑三、四兩」

**少陰病三十四條「少陰病 下利 白通湯主之 葱白四莖 乾薑一兩 附子一枚生」

***少陰病三十五條「少陰病 下利 脈微者 与白通湯 利不止 厥逆無脈 乾嘔 煩者 白通加猪胆汁湯主之 服湯 脈暴出者死 微續者生 白通加猪胆汁湯方 葱白四莖 乾薑一兩 附子一枚生用去皮破八片 人尿五合 猪胆汁一合」

霍乱病九條「吐已下斷 汗出而厥 四肢拘急不解 脈微欲絶者 通脈四逆加猪膽湯主之

甘草 乾薑 附子大者一枚生 猪膽汁」

加猪膽湯、成氏注以_二反治_一、非^レ是、蓋加_二猪膽_一之意、通脈四逆加猪膽湯吳氏注、尤爲_二切實_一、其用^レ尿者、亦可_二類推_一、又猪膽汁、或急遽難^レ辨、所_二以有_一若無^レ膽亦可^レ用之語_一、不_二必所重^レ在_二人尿_一也、

加猪膽湯、成氏注は反治^{通常の治法に相反する治療}を以てす、非是、蓋し猪膽を加えるの意、通脈四逆加猪膽湯の吳氏注、尤も切實^{ぴったりとよく当てはまっている}と爲す、其尿を用いる者、亦類推すべし、又猪膽汁、或いは急遽^{いそぎあわて}辨^{ずる}に難し、「若無膽亦可用」の語有る所以は、必ずしも重んじる所人尿に在らざる也、

○陶隱居曰、薤白、葱白、除^レ青令^レ盡、

○陶隱居曰く、薤白^{らつきょうの鱗茎}、葱白^{ねぎ}は青を除き盡せしむ、

此少陰病要領也、

此少陰病要領^{肝要なところ也}、

四逆變方、^更有^レ如^下當歸四逆湯之兼^二滋養^一、通脈四逆加猪膽湯之兼^レ和^レ陰、四逆加入參湯之兼^レ救^レ胃、皆在^二本病^一亦可酌用^二也、

四逆變方、^更に當歸四逆湯*の滋養を兼ね、通脈四逆加猪膽湯の陰を和するを兼ね、四逆加入參湯の胃を救うを兼ねるが如き有り、皆本病に在り亦酌用^{はからいもちいる}すべき也、

*厥陰病二十六條「手足厥寒 脈細欲絶者 當歸四逆湯主之 當歸 桂枝 芍薬 細辛 甘草 通草 大棗」

霍乱病四條「惡寒 脈微而復利 利止亡血也 四逆加入參湯主之 甘草 附子 乾薑 人參」、

此他、有^下兼^二水氣^一者^上、眞武湯證、是也、

此他、水氣を兼ねる者有り、眞武湯證、是也、

此條既曰^二自下利^一、而又曰^二或下利^一、語意重複、中西惟忠曰、或字下、疑脫^二不字^一、此説是、曰小便利^レ利、曰或小便利、其例一也、

此條*既に「自下利」と曰えども、又「或下利」と曰う、語意重複、中西惟忠曰く、或字の下、疑うに不字を脱^脱すると、此説是、曰く「小便利^便不利」曰く「或小便利」其例一也、

*少陰病三十六條「少陰病 二三日不已 至四五日 腹痛小便不利 四肢沈重疼痛 自下利者 此為有水氣 其人或欬或小便利 或下利 或嘔者 眞武湯主之 茯苓 芍薬 白朮 生薑 附子炮」

○程知論^二附子生熟^一、本^二于張兼善^一、蓋此方證、不似^二四逆證之陽脫^一、故附子炮用、

○程知は附子生熟を論ず、張兼善を本とす、蓋し此方證、四逆證の陽脱に似ず、故に附子炮用す、

有^下兼^二寒逆^一者^上、呉茱萸證、是也、

寒逆を兼ねる者有り、呉茱萸證*、是也、

*少陰病二十九條「少陰病 吐利 手足逆冷 煩躁欲死者 呉茱萸湯主之 呉茱萸 人參 生薑 大棗」

欲^レ死二字、不^レ過^二形^一容煩躁之狀^一、與^二奔豚病、發作欲^レ死復還止^一、同語例、陶隱居曰、呉茱萸一升者、五兩爲^レ正、

「欲死*」二字、煩躁の狀^{かたち}を形容するに過ぎず、奔豚病「發作欲死復還止**」と、同語例、陶隱居曰、呉茱萸一升とは、五兩を正しいと爲す、

**金匱奔豚氣病「師曰。奔豚病從少腹起。上衝咽喉。發作欲死復還止。皆從驚恐得之」

○肘後、療^二卒厥上氣、淹淹欲^レ死、此謂^二奔豚病^一、於^二本方^一、去^二大棗^一、加^二桂、半夏、甘草^一、千金、名^二奔氣湯^一、千金、呉茱萸湯、治^下胸中積冷、心嘈煩滿、汪汪不^レ下^二飲食^一、心胸應^レ背痛^上方、於^二本方^一、加^二半夏、桂心、甘草^一、

○肘後、卒厥上氣、淹淹^{エンエン・氣力のないさま}死せんと欲すを療^{いや}す、此奔豚病と謂うと、本方に於いて、去大棗、加桂半夏甘草、千金、名奔氣湯*、千金、呉茱萸湯、胸中積冷、心嘈^{ソウ・さわがしい}煩滿、汪汪^{たまっているさま}飲食下らず、心胸から背に應^{対応する}じる痛みを治するの方、本方^{呉茱萸湯}に、半夏、桂心、甘草を加える、

*千金方卷十七肺藏 奔氣湯（半夏 吳茱萸 生薑 桂心 人參 甘草）

有_二大腸滑脫者_一、桃花湯證、是也、

大腸滑脫_{脱・滑泄・頻回な下利}者有り、桃花湯證*、是也、

*少陰病二十六條「少陰病、下利便膿血者、桃花湯主之、 赤石脂 乾薑 粳米 」

少陰病二十七條「少陰病、二三日至五日、腹痛、小便不利、下利不止、便膿血者、桃花湯主之」

校裏寒_便膿血之機、蓋自_二下利數日、大腸滑脫、氣益_{益・ますます}内陷、血隨下_溜而來、巢源曰、血滲_{入於腸}、腸虛則泄、故爲_二血痢_一、可_二以見_一也、錢氏謂_二大腸傷損_一、恐無_二其理_一、又_便膿血、非_二眞有_一、如_二腸癰之膿血雜下_一、蓋腸垢與_レ血同出者、巢源痢候、有_二膿涕、及白膿如_レ涕語_一、可_レ徵、

校案ずるに裏寒_便膿血の機、蓋し下利數日、大腸滑脫_{脱・滑泄・頻回な下利}、氣益_{益・ますます}内陷、血隨つて下溜_溜自_二よりにて來る、巢源_{巢元方「諸病源候論」隨代}曰く、血が腸に參入、腸虚せば則ち泄す、故に血痢を爲す、以て見るべき也、錢氏大腸傷損を謂うも、恐らく其理無く、又_{別にまた}便_便膿血、眞に腸癰_{ヨウ}の膿血雜下の如き有るに非ず、蓋し腸垢_{コウ・あか}と血と同出者、巢源痢候、膿涕、及び白膿涕の如き語有り、徵とすべし、

○校此三證、雖_レ有_レ所_レ兼、然不_レ外_二于虚寒_一、故敢列_二于此_一、

○校ずるに此三證_{眞武湯證・吳茱萸證・桃花湯證}、兼ねる所有ると雖も、然り虚寒の外には出ず、故に敢えて此に列_つらねる、

至_二其變_一、則有_二變爲_レ陽者_一、或自_二表寒_一、

其變を至_極めれば、則ち變じて陽と爲る者有り、或いは表寒に自_よる、

此出_二臆揣_一、蓋表寒而陽鬱_二于裏_一之人、其始得_レ邪、爲_二直中輕證_一、及_二其傳_レ裏、變爲_二熱候_一、是也、但表寒裏熱、理似_レ可_レ疑、然附子瀉心湯證、固爲_二表陽虚、而裏有_レ熱者_一、其機與_レ此相近、堅嘗見_二數人_一、冬月薄衣犯_レ寒、始得_二麻附細辛湯證_一、用_レ之五六日、變爲_二胃實_一、與_二承氣_一而愈、於_レ是知_二病之爲_レ變、無_レ所_レ不_レ有也、

此臆揣_{スイ・測}を出_{おし進める}に、蓋し表寒にて陽が裏に鬱_{こも}るの人、其始め邪を得、直中輕證を爲して、其裏に傳わるに及び、變じて熱候と爲す、是也、但表寒裏熱、理疑うべきに似たり、然れども附子瀉心湯證*、固く表陽が虚して、裏に熱有る者と爲す、其機此と相近い、堅_{たしかに}嘗て數人を見る、冬月薄衣で寒に犯され、始め麻附細辛湯證**を得る、之を用いて五六日、變じて胃實と爲す、與_{とも}に承氣を以て愈ゆ、是に於いて病の變を爲すは、有らざる所無きを知る也、

*太陽病下二十七條「心下痞 而復惡寒 汗出者 附子瀉心湯主之」

*少陰病二十一條「少陰病始得之 反發熱 脈沈者 麻黃細辛附子湯主之」

或自_二裏寒_一、

或いは裏寒に自_よる、

亦出_二臆揣_一、蓋病未篤、而溫補過甚、或陽既復、而仍用_二薑附_一、逐生_二闕熱_一者、是也、孫兆曰、有_下本是陰病、與_二溫藥_一過多、致_二胃中熱實_一、或大_便便_便、有_二狂言_一者_上、亦宜_下下也、可_二以徵_一焉、

亦臆揣^{スイ・測}を出^{おし進める}に、蓋し病未だ篤^{トク・病気が重い}ならず、而^{しか}るに^過補過甚、或いは陽既に復して、仍^{なお}薑附を用い、逐^つに^関さわが^{しい}熱を生じる者、是也、孫兆^{宋代}曰く、本是陰病、^過藥を與え^多過^{おおすぎる}、胃中熱實を致す、或いは大僂^便、狂言有る者有り、亦下すに宜しき也と、以て徴とすべし焉、

而熱壅^{半表裏者}、四逆散證、是也、

而^{しか}して熱が半表裏に壅^{ふさ}ぐ者、四逆散證、是也、

*少陰病三十八條「少陰病 四逆 其人或欬 或悸 或小便不利 或腹中痛 或泄利下重者 四逆散主之

甘草 枳實 柴胡 芍藥」

此證不^レ用^{小柴胡}者、以下其壅鬱、非^{枳實芍藥}、不^レ能^{開洩}、不^レ用^{大柴胡}者、以^{胃無實結}、蓋邪壅^{半表裏}、而爲^厥者、何啻少陰變來、其揭^{于本篇}者、亦在^{使下人與寒厥對看}乎、

此證は小柴胡を用いざる者、其壅鬱、枳實芍藥に非ざれば、開洩^能わざるを以て^{にもかかわ}らず、大柴胡を用いざるは、胃に實結無きを以てす、蓋し邪が半表裏に壅^{ふさ}ぎて、厥を爲す者、何ぞ啻^{ただ}少陰變來ならん、其れ^{熱厥}「傷寒論入門」を本篇に揭^かげるは、亦人をして寒厥と對看せしむるに在る乎か、

胃家熱實者、大承氣湯證、是也、

郭雍有^初與^{四逆}、後用^{承氣}按^上、及孫氏所^云、即此也、以愚測^之、此證自^{表寒}變來者爲^多、如裏寒者、政使^{過補太過}、恐不^遽變爲^{胃實}也、周氏曰、自利至^{清水}、而無^{渣滓}、明係^{旁流之水}可^知矣、痛在^{心下}、口且乾燥、其燥屎攻^脾、而津液盡燼、又可^知矣、故當^{急下}、以救^{陰津}、此解頗妥、中西惟忠曰、自利清水之清、當與^{清穀清血之清}、均爲^{圍字}看^上、始與^{色純清}文順、

郭雍初め四逆を與え、後に承氣を用いる按^案有り、及び孫氏云う所、即ち此也、以て愚^自分之を測^{おしは}かるに、此證表寒自より變來する者多と爲す、如もし裏寒者、政^{まさ}に^{過補太過}せしめるに、恐らく遽^にわかな變で胃實を爲すことあらざる也、周氏曰く、自利が清水に至りて、渣滓^{サン・かす}無し、明らかに旁流の水に係^つながるを知るべし矣、痛が心下に在り、口且つ乾燥、其燥屎が脾を攻めて、津液盡^{ことごとく燼}「シャク・いためそこなうするを」、又知るべし矣、故に當に急下、以て陰津を救うべし、此解頗^{すこぶ}妥^{妥当}、中西惟忠曰く、*自利清水^{水様便下利}の清は、當に清穀^{食べたものが消化されずそのまま下る}清血^{大便中に出血することの清と}、均^{ひと}しく圍^厠字と爲して看るべし、始^はじまるに色純清^{固有の糞色なく汚水の如く暗緑青色・森田幸門「傷寒論入門」}と文順^{あとにつづく}、

*少陰病四十一條「少陰病 自利清水 色純青 心下必痛 口乾燥者 可下之 宜大承氣湯」

飲熱相併者、猪苓湯證*、是也、

*少陰病三十九條「少陰病下利 六七日 欬而嘔渴 心煩不得眠者 猪苓湯主之 猪苓 茯苓 阿膠 澤瀉 滑石」

更^出兼變飲邪搏聚、

更^更に^{卷四}兼變の飲邪搏聚に出る、

熱併^{血分}者、僂血、及僂膿血可^レ刺證、是也、

熱を血分に併あつめる者、僂便血、及び僂膿血は刺すべき證*、是也、

*少陰病二十八條「少陰病 下利便膿血者 可刺」

熱在膀胱、即熱結下焦之義、不是是斥言淨府、桃核承氣抵當二條、可徴也、然則僂便血亦大僂便血明矣、

熱が膀胱に在り「熱結膀胱」は、即ち熱が下焦に結ぶの義、是言「熱結膀胱」淨府膀胱を斥さ・指さささず、桃核承氣抵當二條*、徴とすべし也、然れば則ち僂便血亦大僂便血明らか矣、

*太陽病中八十條「太陽病不解 熱結膀胱 其人如狂 血自下 下者愈 其外不解者 尚未可攻 當先解其外 外解已但少腹急結者 乃可攻之 宜桃核承氣湯」

陽明病五十五條「陽明證 其人善忘者 必有畜血 所以然者 本有久瘀血 故令喜忘 屎雖鞭 大便反易 其色必黑者 宜抵當湯下之」

○陰之變陽、王履既曰、或有直傷即入、而寒僂變熱、及始寒而終熱者、其言雖是、猶未明、如注家傳經熱邪之說、則輯義既辨其謬矣、或以爲本篇熱證、本係陽病、不必自變成、以其相似、仍對示之耳、然以承氣三條言之、如口燥咽乾、自利清水、猶可云爾、至腹脹不大僂、則少陰豈有此證、其說不可從、

○陰の陽に變わる、王履既に曰く、或いは直傷即入して、寒が僂便ち熱に變わる、及び始め寒にして終わり熱者有りと、其言是と雖も、猶未だ明メイチョウ・論旨がはっきりとのびて通っていることならず、注家傳經熱邪の説の如きは、則ち輯義多紀元簡「傷寒論輯義」既に其謬誤謬を辨ずる矣、或人おもへらく本篇熱證、本元陽病に係つながり、必ずしも變成に自よるにあらず、其相似を以て、仍ち之を對示する耳、然れば承氣三條*を以て之を言う、「口燥咽乾」「自利清水」の如く、猶爾しか云うべく、「腹脹不大僂便」に至れば、則ち少陰豈此證有らんやと、其說從うべからず、

*少陰病四十條「少陰病 得之二三日 口燥咽乾者 急下之 宜大承氣湯」

少陰病四十一條「自利清水 色純青 心下必痛 口乾燥者 可下之 宜大承氣湯」

少陰病四十二條「少陰病 六七日 腹脹 不大便者 急下之 宜大承氣湯」

有下變爲厥陰者上、蓋少陰之極、更有二端、有下陰陽俱敗、以就暴脫者上、有下利込陰、而孤陽上燔者、如心中煩不得臥、咽痛咽瘡、並係上焦燥熱、故黃連阿膠、猪膚、苦酒諸湯、皆爲潤法、蓋病既涉厥陰者也、

變じて厥陰を爲す者有り、蓋し少陰の極、更更に二端始有り、陰陽俱ともに敗れ、以て暴脫脱に就く者有り、下利陰を込い、而しかして孤陽上燔ハシ・乾かす者有りて、心中煩して臥するを得ず、咽痛咽瘡の如き、並みな上焦燥熱に係つながる、故に*黃連阿膠、猪膚、苦酒諸湯、皆潤うるおす法を爲す、蓋し病既に厥陰に涉わたる者也、

*少陰病二十三條「少陰病得之二三日以上 心中煩 不得臥 黃連阿膠湯主之 黃連 黃芩 芍藥 鷄子黃 阿膠」

少陰病三十條「少陰病 下利 咽痛胸滿心煩 猪膚湯主之 猪膚」

少陰病三十二條「少陰病 咽中傷生瘡 不能語言 聲不出者 苦酒湯主之 半夏 雞子」

此實懸料之言、然此諸方證、皆以潤爲主、不似變陽諸證之必要清涼者上、知是込陰虛燥、稍近厥陰矣、醫學讀書記曰、少陰陽虛、汗出而厥者、不足慮也、若并傷下

其陰_一則危矣、是以少陰厥逆、舌不乾者生、乾者死、斯言稍是、然似_下不知少陰之變爲_一厥陰_一者_上矣、黃連阿膠湯、與_一梔豉_一類、然此以_レ潤爲_レ主、蓋以_レ非_一邪熱壅鬱_一故耳、程氏曰、少陰之有_一咽痛_一、皆下寒上熱、津液搏結使_レ然、無_一厥陰撞氣_一、故不_レ成_レ痺、但視_一氣勢之微甚_一、或潤或解或溫、總不_一用_一著涼藥_一、此說頗當、蓋治_レ咽諸方、要是治_レ標之法已、又勞瘵病極爲_一咽痛_一、其理則一、除大椿注_一苦酒湯_一曰、疑卽陰火喉癰之類、爲_レ當、

此實に懸心_一にける料_一推量_一の言、然り此諸方證、皆潤_一うるおす_一を以て主と爲す、變陽諸證の必ず清涼を要する者には似ず、是_一に陰虛燥を知る、稍_一や_一厥陰に近い矣、醫學讀書記_一尤怡著・清代曰く、少陰陽虛、汗出して厥するは、慮_一詳しく考えめぐらす_一に足らざる也、若し_一并_一あわせて其陰を傷_一やぶれば則ち危うい矣、是以て少陰厥逆、舌乾かざる者生き、乾く者死す、斯_一この言稍_一や_一是、然れども少陰の變が厥陰と爲るを知らざる者に似る矣、黃連阿膠湯、梔豉_一梔子豉湯_一と一類、然り此潤を以て主と爲す、蓋し邪熱壅鬱に非ざるを以て故耳、程氏曰く、少陰の咽痛有るは、皆下寒上熱、津液搏結が然らしむ、厥陰撞_一トウ・うちたく_一氣無し、故に痺を成さず、但氣勢の微甚だしきを視る、或いは潤或いは解_一結を解散する_一或いは溫、總て著明に涼藥を用いず、此說頗_一すこぶる_一當_一あたる、蓋し咽を治する諸方、要するに是標を治するの法已、又勞瘵_一サイ・疲_一病極まり咽痛を爲す、其理則ち一、除大椿が苦酒湯に注して曰く、疑うに卽ち陰火喉癰_一インカコウセン・喉頭結核「漢方用語大辞典」の類、當ると爲す、

○猪膚、諸説不_レ一、校儀禮聘禮、膚鮮魚鮮、腊設_一局鼎_一、注曰、膚、豕肉也、唯燂者有_レ膚、疏曰、豕則有_レ膚、豚則無_レ膚、故十喪禮、豚皆無_レ膚、以其皮薄_一故也、又禮記内則疏曰、麋膚魚醢者、麋膚、謂_一麋肉外膚_一、食_レ之以_一魚醢配_一之_一、今合攷_レ之、則膚是爲_一肉之近_一外多_一脂者_一、古義了然、無庸_一別解_一矣、又錢氏、以_一熬香_一屬_一猪膚_一、誤、

○猪膚*、諸説一ならず、校_一案_一ずるに儀禮_一經書の一つで周代の禮の實際を明記した典籍の聘_一ヘイ禮_一篇、膚_一豕の生肉_一鮮魚鮮_一魚の生肉、腊_一セキ・干し肉_一を局_一ショウ・門の扉につけた大きな鑊_一鼎_一テイ・三本足の鉄の釜・かなえに設_一設置_一す、注曰く、膚、豕_一シ・いのしし_一肉也、唯燂_一シン・_一なる者膚有り、疏曰く、豕則ち膚有り、豚則ち膚無し、故に十喪禮、豚皆膚無し、其皮薄きを以ての故也、又禮記内則疏曰く、麋膚_一ビフ・鹿の切り肉_一魚醢_一ギョカイ・魚のしおから_一者、麋膚、麋肉外膚を謂う、之を食し魚醢に之を配するを以てす、今合せて之を攷_一考_一すれば、則ち膚は肉の外に近く脂多い者と爲す、古義了然、別解を庸_一もちいる_一無し矣、又錢氏、熬_一ゴウ・炒る_一香を以て猪膚に屬すと、誤り、

*少陰病三十條「少陰病 下利 咽痛胸滿心煩 猪膚湯主之 猪膚一斤

右一味 以水一斗煮取五升 去滓 加白蜜一升白粉五合熬香、和令相得、温分六服」 傷寒論攷注 猪膚即猪之皮下

○苦酒湯、刀環、刀、卽古錢、今猶傳_レ世、其形狹長、柄端有_レ環、以安_一雞卵_一、甚適好、

○苦酒湯*、刀環_一刀の頭につける環_一、刀、卽ち_一刀錢_一の古錢、今猶世に傳わる、其形狹長、柄端に環有り、以て雞_一鶏ケイ_一・にわとり_一卵を安_一んじ_一る、甚だ適好、

*少陰病三十二條「少陰病 咽中傷生瘡 不能語言 聲不出者 苦酒湯主之 半夏洗 破如棗核 十四枚 雞子一枚 去黃 內上苦酒 著雞子殼中 右二味 內半夏 著苦酒中 以雞子殼置_一刀環_一中 安火上 令三沸 去滓 少少含嚥之不差 更作三劑」

完 2009/12/05